

島津久基

物語日本文學

源氏物語
上

至
文
堂

昭和二十八年四月十五日 印刷
昭和二十八年四月二十日 發行

物語日本文學

源氏物語上

定價金貳百參拾圓

著者 島津久基

發行者 東京都新宿區拂方町二七
佐藤正叟

印刷者 東京都港區赤坂田町六ノ六
三宅千代松

發行所 東京都新宿區拂方町二七
至文堂

電話九段(33)一四一五番
振替口座東京二九五〇七番

(三協印刷株式會社印刷)

例言

一、本卷には源氏物語五十四帖の中、桐壺卷から藤裏葉卷まで三十三帖を収めることとした。本篇の主人公光源氏の生立から、太上天皇に準ぜられて、權榮の頂點に達したまでの部分である。

一、執筆の方針は、つとめて原作に準據してその精髓を要約して傳へることに心がけ、同時に一般教養の點にも相當考慮を拂つたつもりである。随つて原文そのまゝの口譯ではないが、單なる筋書に終らないやうに留意した。

一、各章の題名は、筆者の附したものであるが、原卷名は各帖の末尾に掲げ、且重要な和歌・詞句等はなるべく本文中に示すことにした。

一、作中の人名は、桐壺更衣・光源氏・紫上のやうに、作者の與へたものと、葵上・玉鬘・雲居雁・髯黒大將のやうに後の研究者の附したものとがあるが、今すべて便宜慣行に随つて改

めない。

一、附録には主要人物の關係を示す略系圖と、原作並びに作者についての簡単な解説として、先年源氏物語展覽會の際の舊稿に僅少の加筆を施したものを添へた。

一、本書は共譯者の中、島津久基が擔當した。

昭和二十八年四月

目次

小序	一
○桐壺の更衣	三
桐壺卷	(源齡一歳—二歳)
雨夜の品定	二
帯木卷	(二七夏)
空蟬卷	(二七夏)
露の夕顔	二七
夕顔卷	(二七夏—十月)
○紫の若草	元
若紫卷	(一八三月—冬)
紅の花	五

末摘花卷……………(一八春—一九正月)

青海波……………

紅葉賀卷……………(一八十月—一九秋)

花宴卷……………(二〇春)

車爭ひ……………

葵卷……………(二一—二三正月)

野宮……………

賢木卷……………(二三九月—二五夏)

花散里卷……………(二五五月)

須磨の浦風……………

須磨卷……………(二六三月—二七三月)

明石の小琴……………

明石卷……………(二七三月—二八秋)

三

六

九

九

一〇

つきぬ縁……………三

落標卷……………(二八十月—二九冬)

蓬生卷……………(二八秋—二九四月)

關屋卷……………(二九九月)

繪合卷……………(三一春)

二葉の松……………一四

松風卷……………(三一秋)

薄雲卷……………(三一冬—三二秋)

槿卷……………(三二九月—冬)

ふりわけ髪……………一六

少女卷……………(三三夏初—三五十月)

形見の撫子……………一六

玉露卷……………(三四—三五十二月)

春のことほぎ……………三八三

初音卷……………(三六 正月)

胡蝶卷……………(三六 三月—四月)

たはむれの螢火……………一九二

螢 卷……………(三六 五月)

常夏卷……………(三六 夏)

篝火卷……………(三六 秋)

野分の朝……………二〇七

野分卷……………(三六 八月)

行幸卷……………(三六 十二月—三七 二月)

髯黒大將……………二一九

藤袴卷……………(三七 八月—九月)

眞木柱卷……………(三七 十月—三八 十一月)

榮えの日……………二七

梅枝卷……………(三九 正月—三月)

藤裏葉卷……………(三九 三月—十月)

附 錄

略系圖……………三五

解 說

源氏物語とは……………三九

紫式部といふ人……………四三

源氏物語上

小序

光源氏の名は、なんと、幾その地上の女人達から羨仰愛慕を恣にし得た美の標徴として永く憧憬られて來たことであらう。源氏物語の聲譽は、日本文學の歴史の上に嶄然として群を抜いて、いつも榮冠を擔ひつづけて來たばかりでなく、今や世界最初の偉大なる長篇小説としての位置を、漸く海外にも認められようとしてゐる。その代りに、光源氏ほど又世の多くの人々に誤解せられ、源氏物語ほど動もすれば正しい評價から見失はれようとしたものも恐らく無いと言つてよい。それほど光源氏は不思議な存在なのである。それほど源氏物語は多面的で複雑な意味を有つてゐる。非難せらるべき點も勿論無いではない。同時に人世教訓の豊富さは、こ

れを補つて餘りがある。それは雨夜の品定だけでなく、全篇の物語それ自身がさうである。觀世音菩薩の再來であつたか如何かは知らぬ。紫式部が世界文藝の奇蹟源氏物語を生み出して、應身の玄妙を示しながら衆生を教化する救世の菩薩であることだけは確である。

いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

といふ桐壺更衣から語り始められるこの物語は、遠つ世の昔物語めいてはゐるけれども、そしてさまざまの昔人や内外の故事などが巧に織り込まれてはゐるけれども、作者の體驗と内生活とがそれに輝かしい生命を與へて、さながら事實物語の印象を讀者に植ゑつけようとするのは、何としてもすばらしい。が、源氏物語はあくまで作り物語である。決して事實小説ではない。つまりそれは御堂殿時代ならぬ御堂殿時代の姿である。同時にいつの世いづれの國でもの現をまざく／＼と見せた鏡である。

では九百年前、この世をば我が世と思ふ望月の往にしめでたき盛りの日に夢を追はう。

桐壺の更衣

華やかにも一脈の哀愁を湛へてこの物語は繰り廣げられる。

美しく優しくか弱い桐壺の更衣は、大空の惠深い光のやうな、尊い廣い桐壺帝の御熱愛を一身に受けて、玉を欺く美しい／＼皇子にさへ恵まれて、よにも幸せな方であつた。併し、それだけに、東宮の御母弘徽殿を始め、他の女御更衣達の冷い嫉視と憎しみの咎から遁れることは出来なかつた。そのいちめられやうは、言葉にするもうとましい悪戯の連続ですらあつた。或時は上に上る道筋に、むさい物が撒き散らされてあつたり、又或時は廊下の兩端を鏡で閉ぢ籠められたり、何かにつけて辛い思ひに泣かねばならない更衣を、帝はなほ／＼いとほしく思召された。かうして御慈みが深まれば深まる程、いよ／＼募る人々の憎しみと嫉みは、さらでだにか弱い女の心をも身をも痛め疵つけて、たうとう皇子が三歳になられた夏、壺に咲く桐の花の儚く散つてゆくやうに、限りない帝の御悲歎の中に、更衣は永久にその美しい臉を閉ぢて

しまつた。

美しい頬はげつそりと病に憔悴で、今はもう消え入るばかりに弱々と臥した更衣の姿を御覽になつては、いぢらしさと悲しさに胸が迫つて、帝はこのまゝどうしても御側を離したうは思されなかつた。けれど、強つて御暇をと願ふ更衣の母に、押してもとは仰せになれなかつた。

「比翼速理とあれ程固い約束をしたものを、どの様な事があつても、お前一人では何處へも行きはしまいね。」

帝の涙に潤んだ御聲に、更衣は力ない目をうつとりと上げて、

限りとして別るゝ道の悲しきに生かまほしきは命なりけり

とばかり、漸つに残り惜しい御別れを告げ參らせ、御車は悲しい軋を残して、里第へと曳き出されていつた。

その夜一夜さをばまんぢりともせず明された帝の御耳に、たうとう悲しい知らせが齎された。禁中の内も外も、唯涙より外に何もなかつた。忘れ形見の皇子なりと、せめて御手に残して御置きになりたいと思召されたが、母君の御喪とあれば、慣例を破るわけにもゆかず、一時

祖母君の許へ下られねばならなかつた。何も知らぬ頑固な皇子は、御涙が止め度なく流れる
 父帝の玉顔を怪訝さうに見上げながら、自分もわけもなく悲しくなられた。その祖母君も、葬
 送の日など、娘と同じ煙に上つてしまひたいとさへ泣き焦れて、車から落ちさうに悶へたので
 あつた。

御手厚い後の御式も済んで、日の経つまゝに、帝の亡き更衣への追慕の御心はますます募る
 ばかり、明くる日も亦明くる日も、唯涙の中に送り迎へさせられて、他の見る目も御痛はしい
 限りである。餘りに度を越えた帝の御寵愛ぶりの眩しさに、目ひき袖ひき、冷い嫉みを投げ合
 うてこそ居たれ、誰も彼も穩やかな優しい憎めなかつた更衣の人柄が、今日になつてしみじみ
 戀しく思ひ出されて來るのであつた。「なくてはぞ人の戀しかりける」とはこの事なのであらう。

野分めいて、俄に膚に冷々とした寒さを覺える或夕暮、一入亡き面影の懐かしさが薔々と御
 胸に迫つて怵へかねさせられた帝は、せめてもの心遣りに、更衣の母の邸へ、鞭負命婦を御遣
 しになつた。夫の大納言には後れ、今又、頼りにも思ひ樂しみにしてゐた娘に先立たれて老
 の身の唯一人、涙に沾ちて明し暮す佻しい邸には、草も葎も茫々と生えるにまかせ、沓えく

とした月影のみが明るく野分の跡を照らしてゐる。有り難いこの御使を御迎へしても、唯先立つものは涙であつた。悲しさも辛さも、亦新たにこみ上げて來て、泣き／＼搔口説く母君の心根に、命婦も引込まれて涙聲に、慰めの言葉も洗み勝ちである。稍あつて、御痛はしい近頃の帝の御有様を陳べて、その御紛らしにでも、早く若君を参内させるやうにとの勅命を傳へた。「暫しは、醒めやらぬ夢ではないかと、ぼんやりとした氣持でゐたが、漸う心が靜まつて來ると、やつぱり現であつたその悲しみ、堪へ難い胸の中を、聞いてくれる人はあなた御一人です。皇子の事も氣がかりだし、一緒にそつと参内しては。」

といふ勿體ない仰言に、母君はいよ／＼噎返るばかり。盡きぬ涙の物語の中に、月はいつか西の山の端近く傾いて、叢には蟲の聲が愁を籠めてすだいてゐる。

帝は未だ御寢にもならず、御庭の花を眺めさせられながら、御氣に入りの女官達と淋しい秋の長夜を、悲しい物語を綴つた長恨歌の御話などをはじめと遊ばされて、御使の歸るのを待つていらせられた。飽かで別れた玄宗と楊貴妃の遠い唐土の故事は、又そのまゝ今の帝の御上と思召すも、無理ならぬ御事である。

尋ねゆく幻士もがな傳てにても魂のありかをそこ知るべく

太液の芙蓉、未央の柳と絶讃へられたあの楊貴妃の容貌、それにも増した更衣のこれは、花鳥の色にも音にも比べ得ぬ可憐さ懷かしさ、思ひ出すにも、まゝならぬ命のみが唯恨めしい。

吹く風の音、咽ぶやうな蟲の音。

帝にとつては、すべてが悲しみの曲を調べてゐる折も折、今宵の月に琴笛の音を上げて、快けに興じて居るのは、更衣を憎みに憎んでゐた弘徽殿女御の御方であつた。

あの祖母君も、悲しみの末終に娘の後を追つた。更衣が亡くなつてから丁度三年の後であつた。

七歳の年を迎へた若君はいよ／＼美しく輝くばかりの皇子となられ、その非凡の風姿學才は、高麗から渡つて來た人相見に目を瞠らせるに十分な程であつた。感歎の餘り、光君と云ふ御名を奉つたとさへ傳へる。帝の御寵愛は何物にも代へられぬ位、深く／＼この若君に注がれた。第一皇子（弘徽殿腹）を越えて東宮にもと思召し、世間もさう見てゐたが、後楯のない皇子の將來を深慮して、人臣に下し源姓を賜つたのは、實は父帝の大きな御情であつた。あの人相見